

『学び』場面の明確化による授業の改善

著者	加藤 隆弘
雑誌名	日本教育工学会第19回大会講演論文集
巻	19
号	2
ページ	827-828
発行年	2003-10-11
URL	http://hdl.handle.net/2297/19405

「学び」場面の明確化による授業の改善

Improvement of class by clarification of “Learning Chance”

加藤 隆弘

Takahiro KATO

金沢大学教育学部

Faculty of Education, Kanazawa University

〔概要〕 総合的学習をはじめとした、教師のねらいによって学習課題を多様に設定することができる学習の場面では、学習成果の教師・学校間格差が顕著に表れる。本論では、「学び」場面の視覚化を研修過程に埋め込むことで、単元構成・授業各時の目的と指導の手だての一体化をはかる力を教師自らが効果的に育む研修方法について検討した。

〔キーワード〕 「学び」の視覚化、授業改善、教師の力量向上

1. はじめに

多くの総合的学習や生活科・社会科・理科のいくつかの単元に見られるような、学すべき内容・レベルが学習者の実態、教材・学習対象の状況によって多様に変化する、そういった教師泣かせの単元・学習機会が急激に増加している。多様な価値・刻々と変化する社会に対応するために、“今日的な課題”を何とか学校の学習レベルに落とし込み、力をつけさせようとしているものであるが、一方では、現実的対応として今日の前にいる学習者たちに、限られた時間・方法で可能な限り力をつけさせるためには、学習のねらい（つけたい力）を最適化し、優先順位を意識しながら（必要なことを最低限学ばせるために、優先順位の低いものを間引いたりしながら）学習を構成せざるを得ない、という実情がある。

筆者はこれまで、学習環境構成を軸とした教師による学習支援・カリキュラム開発

（黒上 1999 ほか[2][5]）と教師による「学び」場面の視覚化[1][4]を組み合わせ、学習構築のための研修・検証方法についていくつかの実践校とともに検討してきた。

ここではこれまでの取り組みから、総合的学習・教科学習において「最低限の学習」を保証するための単元構築の要点、すなわち「学び」場面の明確化と、その確実な埋め込みに至る研修方法について検討する。

2. 研究の方法

各学校の研究実態・経過に応じて＜事前検討＞＜実践場面～事後検討＞各フェーズのいずれかに重点を置き、研修を行う。「学び」場面の「成功事例」「失敗事例」の洗い出し→授業案の再構成（埋め込み）→実践・検証をいずれの場合にもサイクルで行う。この中で各教師の目的・ねらい設定とそれに至る手だての最適化の過程を追跡する。

ここでは主に同様の（コミュニケーションの力の育成を主眼とした）研究を進める

K市A小学校、N町B小学校での取り組みを例に検討を行う。

3. 研修の具体的な流れと各作業のねらい

【研修初期段階】

これから研究・研修を立ち上げていこうとする学校においては、学習の目的・方向性、成果の高い学習場面のイメージが教師間で共有されていないことが多い。したがって初期段階では＜実践場面～事後検討＞フェーズに重点を置き授業検討を行う。授業観察者（と可能であれば授業者も）は各自「学習場面（成功場面）」「失敗場面」と判断した場면을デジカメで撮影する。事後検討において、これらを照合し、各場面についてディスカッションを行う。この際、指導案に現れる「学習の目的」「指導上の留意点」などの主立ったものとの整合性も検討する。ディスカッションを重ねることで・効果的な学習環境構築・必要な学習場面・「学習の目的」「指導上の留意点」などの焦点化がはかられる。

【研修後期段階】

研修を数度重ねた場合、もしくは学習の目的と、これに対応する授業イメージが明確化している教師が一定割合以上いる学校においては＜事前検討＞フェーズにおける効果的なトラブルシューティングが可能となる。いわゆる指導案検討会であるが、目的・場面に焦点化して検討を行うことでそこに至る手だてが適切かどうかを効果的に判断することができるようになる。この場合も、検証のため、実践時のデジカメ記録は行う。

4. これまでの成果

ごく常識的なはずのことではあるが抜けていた、というような類の、いくつかの留意点が教師たち自らの手によって明らかに

され、確認・共有化が進められている。その代表例を挙げる。

- 「学習のねらい・目標」を出来るだけ整理・限定し、具体的に挙げることで、学習のストーリーが先取りしやすくなる
- 目標にマッチした学習場面を必ず埋め込み、その場面に教師の手だて（学習支援・評価アイテム）を配置すると、学習の成果が見えやすくなり、また確実に学習場面を経験させることができる
- 異なる学年で同様の学習場面が現れるが、一方ではそれ自体が学習の目的であるのに対し、他方では学習に必要な一つの“道具”となっている。同じ指導方法をとる必要はないが、繰り返すことでスキルアップされている。
- 場面のイメージ化により事前に「失敗場面」が読めるようになる

Etc.....

【参考文献】

- [1]加藤隆弘（2000.10）：「教師による『学び』場面の視覚化」『教育工学関連学協会連合第6回全国大会講演論文集』、第一分冊 pp463-466
- [2]黒上晴夫、加藤隆弘(1999.9)：「学習環境構成を軸にした総合的学習のカリキュラム開発プロセス」『金沢大学教育学部附属教育実践総合センター 教育工学・実践研究』第25号、pp31-40
- [3]加藤隆弘(1999.10)：「総合的学習における学習環境設計について」『日本教育工学会第15回大会講演論文集』、pp707-708
- [4]加藤隆弘(1999.12)：「総合的学習における「学び」の視覚化による教師の力量に関する研究」『日本教育メディア学会・教育メディア研究』第6巻第1号、pp30-42
- [5]黒上晴夫(1999)：「総合的学習をつくる」日本文教出版